

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.42

平成23年9月1日

庄内しょうないに香る花



会長 藤本 圭佑

平成23年度定期総会において諸議案を御議決いただき、新年度がスタートしました。皆様のご協力に対し心よりお礼を申し上げます。

また、いくつかの課題も見えてきましたので、些細なことでも一つひとつ改善してまいります。そこで、2月の「交流のつどい」では、能楽堂駐車場利用方法の新しい試み、「エコ活」対応の一環として「めぐり」の再利用の導入など、できるところから実践いたしました。

さて、3・11の余震が続くこの4月、躊躇っていた山形行きを実現し、かつての庄内藩・黒川能の里

を訪れる機会を得ました。また

あちこちに雪の残る静かな村落、春日神社に程近い所に黒川能の里おつき王祇会館があり、そこで「黒川能」のオリエンテーションを受け

ることができました。『黒川能は、世阿弥が大成した猿楽能の流れを汲み、現存の五流の能と同系である。いずれの流儀にも属さない独特の形を保ちながら、500有余年春日神社への信仰を支えに、すべて農民の手によって生活の中で伝承しつづけている。現在も2月の王祇祭を皮切りに3、5、11月春日神社に神事能を奉仕するほか、7月羽黒山、8月庄内神社への奉納能も毎年かささない。昭和51年、国の重要無形民俗文化財に指定された』など、大変興味深いものでした。

それにしても、500年もの間、しかも社会構造が大きく変化する中で、一農村に能を誰かが何処から持ち込み何故ここに定着させ

得たのか、とめどもなく不思議の思いが膨らんでいきます。むろん、時の領主等の庇護があつたことは想像に難くないところですが、本質的には、黒川村の人々の春日神社を中心にした堅い結束にあると思います。神事のための能座を上座と下座に分け、それぞれの能太夫を置き、強いリーダーシップを発揮しうる揺るぎない組織を作り上げたこと。加えて世襲的に夫々が役割を果たしつつ芸を競い高める仕組みとしたこと。このハードとソフトの絶妙な二層構造が、エンジンとなり持続的なエネルギーを生み、今も生き生きと機能しているのではないのでしょうか。黒川の人々のたゆまぬ努力に深い敬意を払わずにはいられませんが、少し飛躍が過ぎるかもしれません。世阿弥の「秘すれば花なり。秘せずば花なるべからず」(風姿花伝・第七別紙口伝)の秘事の対象は、文脈からすると観客ですが、私はその向うにいる競う相手の存在を意識します。本来、能楽のもつ魅力と潜在的仕組みがエネルギーを生み、世紀を超えて能楽を世界の文化遺産にまで高め持続させ得たのではないのでしょうか。

私達の横浜能楽連盟は昭和23年創立から60有余年になります。

正確に把握している訳ではありませんが、五流揃って活動している団体は全国的にも珍しいと言われています。それゆえに、これから先も私達が互いに競い合い支えあつて黒川能のように未永く次の世代に引き継いでいく努力をしなければと思っております。

連盟報告(平成22年度後期)

企画事業担当 鈴木 力雄

一、平成23年度総会

4月25日(月) 能楽堂2階レストランで開催、出席者263名(委任状提出者を含む)で成り立った。

提出された四議案は、いずれも原案通り承認された。

- 1号議案 平成22年度活動報告、決算、監査報告
- 2号議案 平成23年度活動計画案、予算案
- 3号議案 横浜能楽連盟規約改正 会計担当理事の交代に伴う金融機関への手続き上必要な改正で、事務所の所在、事務局の分掌、会計書類の処理などの明記することとした改正である。
- 4号議案 役員の選任 新任は、宝生流山添富士子(新堀豊彦前理事枠)、観世流鈴木幸江

は、宝生流山添富士子(新堀豊彦前理事枠)、観世流鈴木幸江

(室屋澄雄前理事枠)の両氏である。

二、横浜能楽連盟主催「能会」

①59回「横浜能」昨年からの春の会となった横浜能は、6月4日(土)に開催した。能は、梅若玄祥師、梅若長左衛門師の両シテによる「千手(野曲之舞)」。狂言は、野村万作師による「簸屑」。入場券は完売で、入場者数は460名(来場率94・7%)。入場者数460/席数486)であった。

②第27回「横浜五流能楽大会」(当番幹事 金剛流)

開催日・場所 平成23年10月1日(土) 横浜能楽堂、五流同一曲、同一箇所競演は謡『土蜘蛛(後シテ「汝知らずやく」)』である。なお、役謡での出演は、個人会員に限定されている。

③第14回「五流交流のつどい」(当番幹事 宝生流)

開催日・場所 平成24年2月18日(土) 横浜能楽堂、なお、大会と異なり、役謡・地謡とも連盟団体会員に所属していれば出演できます。

三、会員数

伝統芸能素人同好会の会員は全国的に減少傾向であるが、今年度4月1日現在の当連盟会員数は465名で、前年の16名減に続いて44名の大幅な減少となつ

た。内訳は、個人413名でマイナス40名、団体企業52でマイナス4団体である。幽玄41号でもお願いしたが、せめて会員数の減少を食い止められるよう皆様の特段のご努力をお願いする次第である。

(注) 幽玄41号「連盟報告(平成23年度前期)」の訂正とお詫び(平成23年度前期)と記載した括弧内は、(平成22年度後期)の誤りでした。

若者に謡を

観世流 佐野 友宥

今年、わが国は未曾有の災害に見舞われました。

しかし過去を振り返ってみると関東大震災、阪神淡路大震災、太平洋戦争、原爆の洗礼などに陥りながら日本はその都度力強く復興して参りました。わが国は「坂の上の雲」を見上げ、国民全員で頑張ってきました。生活レベルの向上、欧米諸国、中でも米国に追いつけ追い越せの共通意識の下に、がむしゃらに働いてまいりました。幸いな事に小生の年代はこのような時代の波の中で自らを鍛え、支えられて来た様に思います。ところが今の時代は、国際化の波が世界を覆い尽くし、日本人の活躍

の場が世界に広がっていく一方で、ニートや引籠もりなど働かない、働くことが出来ない若者が増えていると言われています。また大学生の就職率が史上最低になるなど若者がどのような考え方や能力、技術を身につければ社会に通用する人材になるのか、更に国際社会で尊敬され信頼される人になれるのかということが混沌とした社会情勢の中で見失われつつあります。

ところで私は会社を離れ第二の人生を歩む中で、能「葵の上」を観能して、その美しさとドラマ性、それに演者、お囃子、地謡が創り出す世界に魅了させられました。その後久良岐能舞台で行われていた謡曲の講座で二人の良き先生にお会いする事が出来、謡曲を学び、能楽に惹かれて参りました。

謡曲体験を通して、私は、厳しさと素晴らしい四季が与えられる豊かな日本風土によって育まれた我々日本人の心が、正に能楽であり、謡曲であると思えます。

また、人間の弱さを認めそれからの再生の昇華を支援する「草木国土悉皆成仏」が能の思想であり日本文化の核となるものではないでしょうか。そしてこの様な日本文化を見

つめ直し、身に付けることこそが、国際社会をリードする日本人となる近道ではないかと私は考えます。若者にこそ能、謡曲を学び日本固有の文化を身に付け日本人の心を呼び戻すことで、私達の国を再び世界に誇れる国にして欲しいと願っております。

東日本大震災

義援金について

宝生流 吉田 澄夫

この度の東日本大震災で被災された方々に対し、心よりお見舞い申し上げ、一日も早い復旧をお祈り致します。

東北・北関東には、宝生流の流れの方々も他流に比して多くおられ、全国大会等で顔を合わせたりもしておりますが、中には本人やご家族が被災された方もおられるのではないかと思います。復旧が急ピッチで進められてはいますが、元の生活に戻るにはまだまだ長い時間がかかることでしょう。

このことを思うにつけ、我々にも何か出来ることはないかと考え、義援金を募ることに致しました。神奈川県宝生流には教授囃託会と宝生流連合会という2つの大きな組織があり、月例の謡会を開催しています。そこで3月・4月の会の折に受付

に募金箱を置き、参加者に呼びかけを致しました。また、4月17日には囃託会主催の県大会を横浜能楽堂本舞台にて開催致しましたので、その受付にも募金箱を置き、流友及び見に来て下さった方々にも広く呼びかけました。企業や地域での募金も始まっている中、多くの方々が温かいお志を寄せて下さいました。

その結果、8万5千円という金額が集まりましたので、5月16日に、連合会会長新堀氏と囃託会支部長吉田が、縁の深い神奈川新聞社に出向き、(財)神奈川新聞厚生文化事業団へ寄託しました。ここから日赤経由で被災地に送られるとのことです。

金額的には些少ではありますが、少しでも復旧に役立てばと思っております。そして、被災された流友の方々が謡という趣味を取り戻す日が一日でも早く来ることを願ってやみません。

私の稽古事情

観世流梅若会 山本 晃嗣

平成6年に、今まで20年来、師事して参りました梅若派の佐藤恭司先生がお亡くなりになられた後、同じく梅若派の角当行雄先生が今迄稽古場として居りました佐藤先生のお宅に向いて

教えて下さる事になり、従来通り稽古を続けることが出来る様になりました。

角当先生に習い始めて3年位たった頃、「もうそろそろ三老女なるものを謡って見たいものだ。」と身の程も知らず恐る恐る先生にお伺い致しました所、「ああいいですよ、先ず始めに『檜垣』から始めて見ましょう。」と気軽におっしゃって下さいましてご教示頂く事となりました。

2、3ヶ月して一通り稽古が終わって後先生のお話には「貴方の『檜垣』は弱い老妻の感じは出ていますが、そもそも『檜垣』の女という人は若い時は一世を風靡した日本一の白拍子でした。だから年老いてもそういった風格がごとく凛と伝わって来ないといけません。貴方はどう見ても、そこら辺の街角に座って物乞いをしていく乞食のお婆さんにしか聞こえません。」とのことでした。私は取り付く島もなく唯弱弱しく「はい」と返事をするだけでした。先生は続けて「どんな謡でも気合を入れて謡わないといけません。気合を抜かずに強くも弱くも謡うことが出来るものです。」とのことでした。

現在は先生のお稽古は直接受けて居りませんが響の会の一員

として緑鈴会の末席を細々と汚しております。今は自宅で非常に短い時間ですが一日一回は声を出して謡うようにしております。以前、佐藤先生からは謡は一にも二にも調子が大切だという教えを受けておりましたから現在も調子を大切に気合を入れて謡うよう心掛けておりますが謡い始めると無我夢中になつて謡い終わつてどうだったかなと反省する毎日です。

日暮れて道遠しの感、一しおの現在であります。

夜桜能

金春流 古平 ヌキ

昨年4月2日、靖国神社で催された夜桜能に出かけた。夜桜能とは靖国神社の境内にある能楽堂で毎年、桜の季節に合わせ、ライトアップされた満開の桜の下、能を楽しむ催しである。夜桜能は3日間催され、第三夜の当日は、近藤乾之助による舞囃子「須磨源氏」、続いて野村萬斎による狂言「隠狸」、最後はシテ宝生和英、ワキ宝生欣哉が演ずる能「殺生石」であった。靖国神社は桜の名所だけあつて、当日の参道の両側は屋台がびっしりと並び、満開の桜を楽

しむ人で賑わつていた。第一鳥居、第二鳥居を過ぎて、菊の御紋章のある神門に入ると、夜桜能のために設営されたパイプ椅子の並ぶ会場が現れ、雰囲気は一変する。

6時40分、笛の音が鋭く闇を劈く。それを合図に、火入れ式が厳かに始まる。靖国神社宮司の松明の火が関係者6名の松明へ移された後、3名ずつ2組に分かれて舞台の左右の篝に点火された。火は期待と興奮を呼び起こす。その火に照らし出されてうつすらと明るくなりだす能舞台。その舞台に桜がかかる。自然を取り込んだ舞台である。夜桜と篝火が整い、あとは演者の登場を待つばかりである。

最初の舞囃子「須磨源氏」では、須磨の浦で「若木の桜」を眺める神官の夢の中に、光源氏が古の貴公子の姿そのままに現れて青海波を舞い、筆者もそこに居合わせているような心地がした。狂言「隠狸」では、大酒を飲み愉快に舞う太郎冠者の姿は、萬斎ファンの筆者としては大いに楽しめたものである。最後の能「殺生石」では、シテは若い女人であるため普通は「小面」を用いるが、当日は「万媚」という女面を用いた。「媚」とは、「こびること。また、なまめか

しいさま」とある。この面が、夜桜能の闇の中で篝火に映え、妖艶にして奇怪さを発揮できたのではなかるうか。

屋外で演じられる新能は、能楽堂では得られない良さもある。屋外では四季の移ろいや木々のざわめき、瞬間の風などが感じられ、自然という媒体が観客と舞台とをつなぎ、三者は一体となり、ドラマに臨場感が与えられる。「須磨源氏」ではまさに桜を介して神官と光源氏に観客が加わり、「殺生石」では、本来の季節の「秋」とは異なる別の面白さも加わる。筆者のいる脇正面から見ると、シテは満開の桜の中で舞っているように見え、時にその花弁が一片、舞うシテにゆっくりと落ちてきた。

能と楽しく

喜多流 坂本 浩之

能との出会いは、横浜能楽堂企画のワークショップ第2回「みんなで謡う『高砂』」に参加してからです。それまでは大河ドラマで能をチラッと観る程度で、能楽堂の存在自体知る由もなく、高砂が謡えるようになればいいなあと軽い気持ちからで

した。そこで出雲康雅先生と知り合ったわけで、まず初めての稽古での先生の声量にはびっくりしました。マイクも使わず朗々と謡われるのですが、その声は体全体から出ている能楽堂に響きわたり、私にとつてまったくの未知の声でした。平成11年1月30日に発表会も終わり、引き続き謡を稽古したいという希望者が多く、2月18日に高砂会が発足しました。昼の部は高砂紅葉会、夜の部は掃部高砂会と命名され、私は社員なので掃部高砂会に入りました。先生の声に少しでも近づきたいと思つたわけです。

掃部高砂会は月2回木曜に稽古があり、多い時は17名いましたが、現在は5名です。私は仕事が終わってかけつけても遅くなつてしまひ、仲間迷惑をかっています。仕舞と謡を習っていますが、仕事で休むことも多く、十分な練習もせず模範的な生徒ではありませんが、とにかく続けることが大事だと思つています。

思い出に残っていることは、平成15年4月16日に、厳島神社能舞台で、喜多流の先生方と共に地謡に参加したことです。桃花祭での演能は「猩々」でしたが、貴重な経験をさせていただきました。

した。また、平成19年8月14日に中尊寺白山神社能舞台で、佐々木多門先生の「半部」と出雲先生の「藤戸」を観賞しました。高砂会の仲間と観光もしました。厳島神社も平泉も世界遺産になっていきます。

発表会（出雲会）は年2回、今度は12月3日です。謡と仕舞が終わつた後の懇親会も芸達者な仲間がいて楽しいです。

2月は五流交流のつどい、6月は去年から横浜喜多会能楽大会が始まり、6月11日に第2回が久良岐能舞台で行われました。12年の年月の経過では、覚えることが苦痛になったり、病気になるったり、親が亡くなったり、楽しいことばかりではありませんでしたが、先生に師事し、仲間と共に稽古して、一生の趣味として、能と楽しく付き合つて生きたいと思つていきます。

七十路の手習い

(仕舞事始め)

金剛流 松上 延次

謡曲のつどいに誘われ、楽しく何年か過ぎた或る日、今度はお仕舞を習つてはどうかとのお奨め。今更の感はあるが生来の軽薄、更に丁度七十も半ばを越した。この際、後期高齢者群

への突入を機に、振り返って思
い出にもなるかもとの軽い気持
ちでお引き受けした。

一応の手順で、「熊野クセ」「雪
クセ」「狸々」「鶴亀」と進み、今
は「老松」を稽古している。ま
ったくの初心者で覚えは悪く、
又すぐ忘れる。しかし、師は手
心を加えず徹底的にしごき、稽
古を付けて下さった。有難いこ
と。妥協のないこの熱心な御指
導は、同日に稽古を受ける他の
方々の時間をも奪い、今でも申
し訳なさでいっばい。

何ヶ月か経った最初のお披露
目の日、「一生懸命「仕舞の型付け」
を覚えて舞ったものの、後日ビ
デオを見て本当に愕然とした。
猫背で車夫よろしく両手ぶらぶ
ら。加えて、立ち上がりによる
けているではないか。さりとて
今更、「仕舞をやめます。」とも
云えず、ならばまよ、いっそ

のこと長期戦でと、基礎体力づ
くりよろしく、筋力トレーニン
グやダンベル体操を始めた。驚
いたのは家内や子供達。「今迄
やったことのないのに、年寄り
の冷水もいよいよ加減にして」と口
やかましく云えども聞く耳あら
ばこそ、今は敵も、「無茶はし
ないで、年を考えて」が精いつば
いの有様。

でも、仕舞をはじめて本当に

よかったと思う。勿論、仕舞の
初歩すら身につけていないもの
の、仕舞を観る見方が少し変わ
ったかと自画自讃。

例えば、「海人(玉の段)」は決
意に燃えた女の壮絶な海中劇。
子を思う「母」と父大臣を思う女
「母と女」、「無限の愛と変化」を
どの様に舞い分けるのだろうか。
「藤戸」も然り。漁夫殺害状況
の再現、その死骸が悪竜の水神
となり、最後は盛綱の反省と供
養によって『生死の海』を彼岸
に渡って消えて行く……。こ
の流れの中で決して消えること
のない怨念の暗さ、更には人間
の不幸、憎悪恩愛を超えた世
界をどのように仕舞で表現する
のだろうか。……、と果て
のない空想の世界に遊ばせてく
れる。本当にゾクゾクするほど
楽しい。

勿論未熟、しかし謡いに仕舞
が加わったことで少しは理解の
領域が広がるのではないかと
ぬぼれながらも一層楽しみが深
まる。感謝、感謝。

私と謡の「甘い生活」

宝生流 山添富士子

私の先生は、プロは皆そうら
しいが、ほとんど弟子をほめる
ことがない。自分では完璧に仕

舞を舞えたつもりでも、与えら
れる最上級のほめ言葉は、「ま
あまあだつた」である。まして
今ひとつ自信のなかつた時など
は、容赦ないダメ出しが出てく
る。その厳しさが「愛のムチ」
なのだということは重々わかっ
ているが、先生の舞台姿をうっ
とりと眺めているような凡人の
身としては、「やっぱり私には
才能ないのかなあ」と落ち込む
こともしばしばである。

しかし一方、連合会、嘱託会
といった横浜の会に参加してい
ると、謡ったり舞ったりする度
に、先輩の方々が「良かったよ
」「上手くなったね」などと温い
言葉をかけてくださる。甘いア
メのようなそのほめ言葉が、八
割方社交辞令だということはお
かかっていても、ついつい頬はゆ
るみ、ちよつびりうぬぼれたり
もしてしまう。

このように、落ち込みとうぬ
ぼれとを自虐的に味わいながら
私の謡人生は30年を超えようと
している。大声を出せばストレ
ス解消にいいからと、訳のわか
らない勧誘にのって始めたお稽
古だが、熱心には言えないま
でもこれまで続けてこられたの
は、私の中に謡うことや舞うこ
とを心地よく感じる気持ちがあ
ったからだと思う。それに加え

て、先生の厳しい愛のムチと、
諸先輩方のほめ言葉という甘い
アメを相互に味わう刺激もまた、
たまらなく心地よい。

まもなく還暦を迎え、身体の
衰えを感じることも多くなつた
昨今だが、「年のせいかな足腰が
…」などと言おうものなら、「ま
だ若いのに何を」と、80代90代
の先輩方に笑われ、こちらから
ほめ言葉をかけてあげるべき後
輩はなかなか増えない。まだま
だ私の謡人生は先が長いとい
うことなのだろうか。

能楽堂だより

二十三年九月以降の公演

二十三年度、九月一月の横浜
能楽堂の公演予定は、次のとお
りです。このほか毎月第二日曜
日に「横浜能楽堂普及公演」横
浜狂言堂」を開催いたします。

東日本大震災チャリティ公演

「古典芸能のつどい横浜」

九月三日(土) 午後一時開演

素謡「翁 初日ノ式」金春安明 他

独吟「松虫 キリ」大坪喜美雄

仕舞「融」守屋泰利

日本舞踊 長唄「島の千歳」

藤間恵都子

日本舞踊 長唄「槍をどり」
水木佑歌

琉球舞踊「総掛」
児玉清子 児玉由利子
琉球箏曲「六段管覧」
名嘉ヨシ子 他

狂言「茶壺(大蔵流) 山本東次郎
能「羽衣 替之型」
(金春流) 山井綱雄 他

仕舞 等
全席指定五千円
チケット発売中
第二十八回横浜かもんやま能
十一月十二日(土)午後二時開演
能楽師による実技と解説
柴田稔 笠井賢一

狂言「文蔵(大蔵流) 茂山千五郎
能「松風(観世流) 観世鍬之丞
S席四千元 A席三千五百円
B席三千元
チケット発売日
九月十七日(土) 正午から

特別公演
十二月十七日(土)午後二時開演
狂言「寝音曲(大蔵流) 山本則俊
狂言「祐善(大蔵流) 山本泰太郎
狂言「祇園(大蔵流) 山本東次郎
S席六千元、A席五千元、
B席四千元
チケット発売日
十月八日(土) 正午から

(初日は電話・Webのみ)
お問い合わせ・お申し込みは、
TEL〇四五(二六三)三〇五五まで。